

える必要もなく、誰にへつらうこともいらない。体制化されたプロの研究者の世界ではすでに失なわれた清潔さ、純粹さを感じるのである。

もしここに、ブルトーザの如き掃天器械が登場すればもはやこのような競技は成り立たず、この彗星発見競争は歴史上の遺物的文化活動となってしまい、本書も20世紀にあった人間の楽しみの一行事を記録する貴重な文献となってしまうかもしれない。もしかすれば自分が人類としてはじめて観たと記録される星が見つかるかもしれないと思いつつ星空を眺めるアマチュアの楽しみが、ずっと続いてほしいと思うのは評者の保守的感覚によるのであろう。

(斎藤 衛)

雑報

太陽電波研究会（1980年2月5～6日）

科学研究費の補助を得て太陽電波研究会が開かれるのはこれで3回目である。第1回研究会が開かれた1976年は名古屋大学空電研究所田中春夫教授が東京大学東京天文台へ移った時で、大型宇宙電波望遠鏡の設置調査費が認められて2年目であり、この計画が正に緒についたという時期であった。2回目は2年後で大型宇宙電波望遠鏡の建設が進行し始めた時にあたり、計画がどの程度の規模で実現するかという点が把握し難く、そうした状況が、統一のとれない将来計画への見通しとして、集録からも読み取れる。今回はこうした云わば暗中模索の時期を経て大型宇宙電波望遠鏡の出来上りの姿が組織を含めて曲りなりにも明らかになった時にあたる。

研究会のスタイルとしては、トピックスと各研究室、研究所を単位とした観測報告を中心に置き、観測装置の現状と近い将来計画にも言及し、最後に将来計画について議論する——という型が定着している。

冒頭に述べた背景を反映して、外国に於ける太陽電波研究の状況、将来計画等について熱心な議論があった。現在日本ではcm波帯に於ける太陽電波観測が充実しているが、このことから、cm波帯太陽電波研究の意義、cm波帯高時空間分解能ラジオヘリオグラフのデザイン及びこれらの研究組織・体制等について論議が集中した。具体的計画としてはまだまとまる段階までには至らなかったが、日本に於ける現有装置から考え、また各国に於ける高速超合成宇宙電波望遠鏡の進行状況を配慮するならば、日本国内に一台という規模の観測装置が必要であろうという点では意見の一致が見られた。

また、タイムスケジュールについては、次の太陽活動（第22周期）の極大は1991年頃と推定されること、そして現在の大型宇宙電波望遠鏡が素案作成段階から約10年の年月を経て実現していることを考慮すると、直ちに計画の具体化に着手する必要があることが確認された。

今回の参加者は27名で、内訳は電波研平磯支所、東大天文教室、東大東京天文台、名大空電研、名大理学部、京大理学部等であった。詳細については後日出る集録を参照されたい。

追記 本会での合意に基づき、2月13日に東京天文台に於いて、東大東京天文台、名大空電研、名大理学部から参加者を得て、早急に計画を具体化することについて話し合いの機会が持たれた。この内容については別に記述する折があると思う。

(鰐目信三)

☆ ☆ ☆

☆ ☆ ☆

1980年3月の太陽黒点(g, f) (東京天文台)

1	—, —	6	—, —	11	6, 23	16	10, 24	21	8, 72	26	17, 105
2	12, 64	7	—, —	12	5, 25	17	6, 16	22	—, —	27	14, 94
3	—, —	8	10, 47	13	8, 38	18	8, 22	23	11, 71	28	17, 126
4	10, 46	9	—, —	14	—, —	19	—, —	24	15, 94	29	10, 110
5	—, —	10	5, 19	15	5, 18	20	11, 68	25	17, 92	30	15, 159

(相対数月平均値: 121.1)

31 —, —

昭和54年5月20日 印刷発行 定価300円	発行人 〒181 東京都三鷹市東京天文台内 印刷所 〒162 東京都新宿区早稲田鶴巣町251 発行所 〒181 東京都三鷹市東京天文台内 電話 三鷹31局(0422-31)1359	社団法人 日本天文学会 啓文堂松本印刷 社団法人 日本天文学会 振替口座 東京 6-13592
------------------------------	---	--